

# 形態論的な視点から見た「的」の語基

王 娟

(厦門大学嘉庚学院)

## 1. はじめに

国立国語研究所が2001年から2005年までに行った「現代雑誌200万字言語調査語彙表」<sup>1)</sup>によると、日本語の接尾辞「的」の使用率順は、全体の44位であった。また、「一」「二」などの数字を除くと、20位であった。その20位内にある他の語は、「する」「いる」「いう」など日常の基本語であった。一方、同じ国立国語研究所が、1877年11月から1878年10月までの一年分の「郵便報知新聞」を資料とした調査の結果からは、「的」の使用度数はただの二回であった。この二つの調査の対象は雑誌と新聞で、それぞれ異なるが、両方とも一般に小説より直接的にその時代の一般的用語の状況を反映していると考えられる。社会生活用語の大体の状況の変化としても、「的」が明治時代の一年間（1877～1878年）に二回の出現頻度から2005年の第20位に上昇したことからは、明治時代の1877年頃から2005年までの130年の間に、接尾辞「的」の使用率には著しい変化があったと言わざるを得ない。「短时日のうちに用法を広げるという点では、言語変化の様相を見るのに好適な例である。このような語例の観察を蓄積することで、日本語の変化、言語一般の変化の規則性を探る手がかりになるのではないか」と小出（2004：12）は指摘しているが、使用率が急激に上昇した「的」の歴史的变化を探るには、大きな意味があると考ええる。

以上の背景と現状を踏まえて、筆者は、接尾辞「的」に関する先行研究を調べてみた。従来の先行研究は共時的な視点で、統語論と意味論の立場から「的」の語基を考察したものがほとんどである。また、通時的な視点から「的」を考察する研究は極めて少ない。現代日本語の「的」に関する研究のデータは古く、新しい変化を反映していないという事実もある。河上（1996）、「最近の認知言語学的アプローチが新しく貢献しつつある分野として、歴史的研究が挙げられる」と指摘している。氏は、「このような歴史的・通時的な意味変化に対しても、共時的研究で有効だとされた認知的概念を用いて見直し、意味変化を単に記述するにとどめるのではなく、その動機付けをも探ろうとする動きが近年目立ってきた」と述べている。しかし、認知言語学の視点から「的」のプロトタイプを考察した先行研究は、管見の限り、山下（2011）しかない。山下（2011：141）は、次のように述べている。

このような研究はまだあまり多いとはいえず（中略）字音接辞についての意味論的研究はまだまだ限られたものについてなされているに過ぎない。造語力を発揮する字音接辞について、多義性のあるもののプロトタイプの意味を明確にし、その意味的關係を記述することは、日本語の語構成研究や日本語の語彙教育への応用のためにも必要なことと思われる。

本文の目的は、通時的観点を取り込んで、形態論的に各時代にある「的」の語基の典型的な特徴とその周辺的な特徴を考察し、またその典型的な特徴は歴史的にいかん拡張していくかを認知言語学の立場で捉えていきたい。

本文の成果を通して、日本語の「的」の歴史的な変遷を明らかにすることにより、その特徴を把握することは、現代日本語の接尾辞「的」の歴史的背景を明らかにすることができると思われる。さらに、それにより、「的」の歴史的な変化の動機を探ることに貢献することもできるのではないかと考えている。

## 2. 研究方法

王・曲・林 (2001: 146) は、「社会的」「合理的」「抽象的」「積極的」のような「的」が付くナ形容詞のことを「的」付きナ形容詞と呼び、「簡単な」「便利な」「明確な」「重要な」のような「的」が付かないナ形容詞のことを非「的」ナ形容詞と呼んでいる。本研究では、その呼称を使用する。

また、データとしては、本研究は、『和英語林集成』初版から『広辞苑』第六版まで、全部で15冊の国語辞典を中心に調査する。調査した時期は、140年を超える。選定基準などは、既に王 (2011) などで詳しく述べているが、ここでは、読者に分かりやすくするため、その15冊の辞典の出版年度、辞典名、編集者、収録語数を次の表1に示す。

表1 15冊の国語辞典の詳細

	出版年度	辞典名 略記	出版社	編集者	収録語数
1.	1867年 (慶3)	『和英語林集成』初版 『和』初	American Presbyterian Mission Press	J・C・ヘボン	2万余
2.	1872年 (明5)	『和英語林集成』第二版 『和』二	美華書院	J・C・ヘボン	2万2千余
3.	1886年 (明19)	『和英語林集成』第三版 『和』三	丸善商社	J・C・ヘボン	3万5千余
4.	1888年 (明21)	『ことばのはやし』 『はやし』	みずほや	物集高見	2万4千
5.	1891年 (明24)	『言海』 『言海』	秀英舎	大槻文彦	4万
6.	1894年 (明27)	『日本大辞林』 『大辞林』	宮内省	物集高見	15万
7.	1898年 (明31)	『ことばの泉』大増訂 『大増訂』	大倉書店	落合直文	13万
8.	1908年 (明41)	『ことばの泉』大増訂補遺 『補遺』	大倉書店	落合直文	20万余
9.	1925年 (大14)	『広辞林』 『広辞林』	三省堂	金沢庄三郎	16万

10.	1939年 (昭14)	『辞苑』 『辞苑』	博文館	新村出	約16万
11.	1955年 (昭30)	『広辞苑』 第一版 『広』 一	岩波書店	新村出	20万余
12.	1969年 (昭44)	『広辞苑』 第二版 『広』 二	岩波書店	新村出	約20万
13.	1983年 (昭58)	『広辞苑』 第三版 『広』 三	岩波書店	新村出	20万余
14.	1998年 (平10)	『広辞苑』 第五版 『広』 五	岩波書店	新村出	23万
15.	2008年 (平20)	『広辞苑』 第六版 『広』 六	岩波書店	新村出	24万

なお、辞典がその当時の言語を完全に反映していると言えない部分もあると考えられる。例えば、「挑発的」は、『広辞苑』第三版（以下、『広』三に略記）には掲載されていないが、『広辞林』（1925）から『広辞苑』第二版（以下、『広』二に略記）までの辞典にはすでに載っている。さらに『広辞苑』第五版（以下、『広』五に略記）にも載っている。『広』三の出版年度前後だけに「挑発的」は使わなくなったという可能性は低く、辞典の編集方針か編集者のミスなどの原因で収録していないのではないと思われる。つまり、辞典の収録単語の変遷は、時代的な語彙の変遷を反映するだけでなく、編纂方針の変化、ページ数の変化、編集者のミスなども考えられる。従って、そのような欠如を補完するために、本研究では、論述する際、新聞のデータベースや他の文献資料をも参照し、なるべく全体的に、客観的に「的」の歴史的な変遷を把握するつもりである。

また、本研究の調査によると、「的」付きナ形容詞の語基を最初に収録した国語辞典は、1898年に出版された『大増訂』だと分かった。本文では、まず、『大増訂』の語例を観察し、形態論的な視点からそれらの語例の典型的な特徴とその周辺的な特徴をまとめる。今までの「的」に関する研究は、主に形態論、意味論という視点から「的」付きナ形容詞の語基について考察している。形態論的な考察としては、山田（1961）、遠藤（1984）、南雲（1994）、廖（1996）、丸山（1997）、王淑琴（2000）、王娟（2004）などがあり、「的」の語基の語種や文字数について「二字漢語が圧倒的に多い」と指摘しており、筆者の修士論文のデータにも同じ傾向が見られた。本文は、「二字漢語が圧倒的に多い」という形態論的な特徴について再確認する。また、その典型的な特徴が、時代に沿って、どのように変化・拡張していくかを考察する。

### 3. 概念の説明

本節では、本文の考察と関わっているいくつかの定義と概念を説明する。

#### 3.1 「語」「文」「句」

形態論（morphology）とは、言語学の一分野で、語と語の間の意味的・形態的なパラダイム関係や、語の内部構造について論じる学問分野である。文のなかでの複数の語の統語的關係を論じる統語論とは区別される。

しかし、何を「語」とするのか、その基準を定めることは意外と難しい。さまざまな基準が考えられうるが、齊藤（2010）が提示している音韻的基準と形態的基準が分かりやすく、また信憑性が高いと考え、本研究はそれを参照して「的」の語基を判断する。以下にその齊藤（2010：50）による「語」の基準を示す。

## (1)

- ① 音韻的基準：アクセント的にひとつの単位となる。

（例えば、「ながの●○○<sup>3</sup>」＋「えき●○」→「ながのえき○○●○○」は一つの単位である。「前総理（ぜんそうり）●●●○○」は、一つの単位ではない。）

- ② 形態的基準：

- i) 語の中に別の要素が入ることはできない。

（例えば、「さかな」や「経済」といったことばの中に何か別の言葉を入れることはできないから、一つの語と認める。）

- ii) 語の一部を修飾することはできない。

（例えば、「固くなったあんパン」はパン全体が固いのであって、あんだだけ固いのではないから、「あんパン」は一つの語と認める。）

- iii) 語の一部を文の中で移動させることはできない。

（例えば、「君がミルクティーを注文した」という文の一部を移動させて「\*ミルクは君がティーを注文した」のようにすることはできないので、「ミルクティー」は一つの語と認める。）

- iv) 語の一部を（指示代名詞で）指す（照応させる）ことはできない。

（例えば、「水遊びをしていたら、それが通行人の頭にかかった。」という文において「それ」が「水遊び」の「水」を指すことはできないので、「水遊び」は一つの語と認める。<sup>4)</sup>

また、齊藤（2010）は、「非合法的（ひごうほうてき）」を例としながら、そのアクセントは「●○○○○△△」となることから、アクセント上一つの単位にはならないと述べている。しかし、『NHK日本語発音アクセント辞典』によると、「非」と「無」という接頭辞によって生産された派生語のアクセントは一つの単位になり、「反」という接頭辞の派生語のアクセントは一つにならないようである。例えば、「衛生（えいせい）」は、「○●●●」で、「非衛生（ひえいせい）」は、「○●○○」になり、「合法（ごうほう）」は、「○●●●」で、「非合法（ひごうほう）」は、「○●○○」になる。一方、「社会（しゃかい）」は、「●○○」で、「反社会（はんしゃかい）」は、「●●●○○」になる。このように『NHK日本語発音アクセント辞典』に従うならば、齊藤（2010）の判断は事実を反映したものではない。このことに基づき、本文では、「非○○」と「無○○」の派生語は一つの語と認め、「反○○」の派生語は二つの語が結合した複合語とする。

一方、次の例文のように格助詞を含む単文や複文、ことわざ、また、符号が入っている単文や複文は、本文では「文」と「句」の類に入れる。

(2)

① 格助詞を含む単文や複文：

このような「みんなで考えよう」的な企画が並んだことについて、奈須野委員長は「委員会内でも、天皇問題やリクルート問題に対し何らかの主張を出すべきだ」という意見はあったけれど、結論が出なかった。

(毎日Newsパック<sup>5</sup>1989年05月26日)

② ことわざ：

東南アジアでは、日本の援助で病院が完成したが、肝心の医師や薬品がなく、数年でスラム化したケースもあり、「仏作って魂入れず」的な援助に批判も出ていた。

(毎日Newsパック1987年09月10日)

③ 符号が入っている単文や複文：

そうした論が、結局、<「自然=自由主義」的なイデオロギー>を覆い隠すとみるのが、『映画芸術』夏号での文芸評論家、中島一夫だ。

(毎日Newsパック2011年08月29日)

### 3.2 語種

本研究の言う「語種」とは、日本古来の語である和語、中国から入った漢語、中国以外の外国から入った外来語、また混種語の四種類を指す。これらの語種の判断基準は、基本的に、音読と訓読の違いによる。例えば、「事情(じじょう)」は、「事(じ)」と「情(じょう)」が両方音読であるから漢語と見なすことができる。一方、「事柄(ことがら)」の「事(こと)」と「柄(がら)」は、両方訓読であるので和語と見なされる。また、「仕事(しごと)」は、「仕(し)」が音読で、「事(ごと)」が訓読みであることから混種語となる。なお、日常用語では漢語と和語の語基がカタカナで表記されることがあるが、本文では、そのような語は外来語とせず、漢語あるいは和語と見なす。例えば、以下の「ガラクタ(的な)」は、カタカナで表記されているが、和語と見なす。

(3)

そう言えば我が家にもガラクタ的な古い貨幣や紙幣があったなあと、戸棚の奥から引っぱり出した。

(「声」<sup>6</sup>2001年02月04日)

### 3.3 熟語

「熟語」は、『広』六によると、二つ以上の単語または二字以上の漢字が結合してできた語のことである。例えば、「夜明け」「買物」「読書」などである。また、熟語には、二字熟語、三字熟語、四字熟語などがある。二字熟語は例えば、「教育」「規則」「動物」などの語を指し、三字熟語は、例えば、「悪循環」「殺風景」「茶飯事」などの語を指す。また、四字熟語には、例えば、「一致団結」「熟慮断行」などがある。

#### 4. 形態論的に見た「的」の語基の特徴

##### 4.1 『ことばの泉』大増訂での形態的な典型的特徴

まず明治31年の『大増訂』に収録された13語の語基を挙げ、その典型的な特徴を観察する。

(4)

強的、可覚的、覚性的、可知的、機械的、貴族的、後天的、悟性的、審美的、消極的、積極的、先天的、端的<sup>7</sup>

以上の13の語例を観察すると、13語中11語の語基が「二字漢語」であることから、「二字漢語」というのが、これら13語の「的」の語基の典型的な特徴だと言える。しかしながら、先にも指摘したように、語基に言及する際には、当該の形式がまず「語である」と「漢語である」という二つの条件を満たす必要がある。以上、形態論的な視点から見た明治時代の「的」付きナ形容詞のプロトタイプは、次に挙げる三つの典型的な特徴によって規定されることになる。

(5) 明治時代の形態的な典型的特徴

- ① 文や句ではなく、語である。
- ② 漢語である。
- ③ 二字熟語である。

この三つの典型的な特徴を全て満たしている語が、形態論的な視点から見た明治31年頃の「的」の典型的な語基だと考える。この典型的な語基は、以下の11語である。

(6)

機械(的)、後天(的)、消極(的)、可覚(的)、審美(的)、貴族(的)、積極(的)、先天(的)、覚性(的)、悟性(的)、可知(的)

(6) に示す形態論から見た典型的な語基以外に、典型的な特徴ではなく、周辺的な特徴を持つ語の存在も確認された。「強(的)」と「端(的)」である。この2語は、典型的な特徴①の「文や句ではなく、語である」および②の「漢語である」を満たしているが、③の「二字漢語である」を満たしていない。2語とも漢字一字の語基である。

また、『大増訂』以後のデータを考察すると、(5) に示した三つの特徴は、典型的な特徴として、それ以後の大部分の語基も有していることが確認できた。具体的な状況については、次節で説明する。つまり、この三つの特徴は、通時的な視点で見ると、明治時代だけでなく、平成の現在まで「的」の語基の形態的な典型的特徴として変わっていない。一方、これらの典型的な特徴の周辺には、典型的な特徴より拡張した周辺的な特徴があり、次節では(5)で示す三つの典型的な特徴が、時代に沿って、具体的にどのような拡張があり、またいつそれらの拡張が発生したかを分析する。

## 4.2 特徴①の拡張

特徴①、すなわち、「文や句ではなく、語である」という特徴は、『大増訂』と『補遺』の明治時代から『広』五まで長い間厳密に保持されてきたが、『広』六になるとこの特徴から逸脱した語例が散見されるようになってきた。

まず、『広』六の「的」に関する以下の説明を見てみる。

(7)

(中国語の「的」(助詞「の」にあたる)をそのまま音読した語) 名詞や句に添えて、その性質を帯びる、その状態をなす意を表す。江見水蔭、女房殺し「此石動くべきか、動かざるべきか、お鉄は判断に苦しむ-挙動で」「公—」

(7)の記述によると、「的」付きナ形容詞の語基は、特徴①の「語」から「句」へと拡張している。なお、『広』六には文を語基とする「的」の例は収録されていないが、日常生活では、しばしば見かける。下に実例をいくつかあげる。

(8)

この「臭い物に蓋(ふた)」的な発想で本当にいいのだろうか。

(「声」2008年5月30日)

そう考えれば、21日のおわび放送も、キー局のフジテレビが謝罪会見をすべきなのに、「関西テレビがやったことだ」的な対応だ。

(「声」2007年1月27日)

こんな「老人運転・姥(うば)捨て山」的な施策に異を唱えるのは私だけだろうか。

(「声」2007年3月2日)

内閣支持率が上昇しない背景に、福田首相の「他人任せ」的な優柔不断な姿勢がある。

(「声」2008年3月13日)

数多くの先行研究は、(8)に示された「的」の用法を新しい時代の「的」の新しい用法としている。しかし、「的」付きナ形容詞の語基部分に「句」が出現するのは平成になって始めてのことではなく、明治時代の末にも一時出現したことがある。それに関して、広田(1969:303)は、次のように記述している。

明治前期の「的」の用法は、(中略)単語につくだけでなく、文や句にもつく例も、まま発見するのである。

文章新論 坪内雄蔵 中央学術雑誌 第28・32号 明治19・5~7 (1886)

予がいふ反訳文は今の新聞紙の文体をいふ也「豈それ然らんや」的の文章若くは「アナ喧や静まらずや」的の文献をいふなり

新日本之青年 徳富猪一郎 明治20 (1887)

而シテ之ヲ問ハント欲セハ先ツ須ク彼ノ東西旧新ノ両主義ハ果シテ其性質ニ於テ両立シ得

可キのモノナルカ否ヲ繹子サル可ラス。

(第五回)

こういう用法も、現代語のなかでは、ほとんど姿を消してしまったといつてよい。

広田(1969)が引用した例文と(8)に示された現代日本語の例文は、語基部分に文やことわざが使われていること、また引用符号の「」が使用されている点で類似している。しかし、広田(1969)は、この用法は、「現代語のなかでは、ほとんど姿を消してしまった」とも述べている。広田(1969)の発表年代から見ると、確かに明治末からその年代つまり昭和後期までの間に「的」の語基部分に文や句が現れるという用法はなく、新たに出てきたのは平成に入ってからである。従って、「的」付きな形容詞の語基部分に「句」が現れるというのは典型的な特徴からの新しい拡張ではなく、一種の「復活」とも言える現象であろう。

#### 4.3 特徴②の拡張

特徴②の「漢語である」は、明治41年に出版された『補遺』からその拡張例が出現している。それは混種語の「場所(的)」であるが、『補遺』の拡張例はこの1語だけである。「場所(ばしょ)」は、和語の「場(ば)」と漢語の「所(しょ)」の混種語である。「場所的」は、『補遺』では「場所的分業」のように被修飾語を含めるフレーズの形で見出し語に収録されている。しかし、「場所的分業」以外に「場所的」の使用例はないため、最初に「場所的」という表現があり、その下位表現として「場所的分業」があるわけではなく、何らかの背景を持ち、最初から「場所的分業」を造語として作ったのではないかと推測できる。『補遺』には、「場所的分業」以外に、「技術的分業」「個人的分業」「職業的分業」「国際的分業」などの見出し語がある。これらの語こそが、まさに「場所的分業」の作られた背景と思われる。

「場所的」の次に現れた拡張例は、昭和14年の『辞苑』に収録された「鵯(ぬえ)的」という和語である。また、「鵯的」以外に、平成までもう一つの和語の拡張例がある。それは、平成10年の『広』五に収録された「浪花節的」である。

外来語への拡張例は、昭和30年の『広』一から現れ始めた。『広』一に収録された外来語を語基とする「的」は、「アジヤ的」「アポロ的」「コペルニクスの」「スコラの」「ディオニュソスの」である。その後、昭和44年の『広』二には、「ファウスト的」が収録されている。

#### 4.4 特徴③の拡張

特徴③の「二字熟語である」の一字漢語、三字熟語、四字熟語、五字熟語への拡張例は、時代に沿って整理すると、下の表2のようになる。

表2 特徴③の「二字熟語である」の拡張例

最初に収録された辞典	一字漢語	三字熟語	四字熟語	五字熟語
7. 『大増訂』	端的、強的			
8. 『補遺』	外的、詩的、美的、病的、蛮的、物的	宇宙論的、物理学的		

9. 『広辞林』	史的、全的、内の、 靈的、性的、禪的	進化論的		
10. 『辞苑』	劇的、鵠的、知的、 心的、肉的	非論理的、地理学 的、第二義的、宗教 学的、非現実的、無 軌道の		
11. 『広』一	公的、私的、人的、 静的、動的、法的、 学的	現象学的、存在論 的、人間学的、弁証 法的、無意識的、画 時代的、人性論的、 世紀末的	物理神学的	気体運動学的
12. 『広』二	狂的、質的、量的	経済外的、合目的 的、超越論的	人間中心的	
13. 『広』三		幾何学的	形而上学的	
14. 『広』五		近視眼的、前近代 的、前時代的、天文 学的、浪花節的、非 生産的、目的論的、 反社会的、非人道的 、加速度的	幾何級数的、 資本集約的、 労働集約的	
15. 『広』六		解釈学的、言語論 的、反事实的、非人 間的、非自発的		

表2から分かるように、特徴③の「二字熟語である」からの拡張は、最初漢字一字の語基への拡張で、「端的」と「強的」である。その後、明治41年の『補遺』から昭和44年の『広』二までの間に、漢字一字の語基は数多く現れたが、昭和58年の『広』三から新しい漢字一字の語基は見えない。

また、表2から分かるように、二字以上の熟語への拡張は、三字熟語に集中している。拡張例が確認された時代から見ると、昭和中期までに集中していた一字漢語の拡張と比べると、二字以上の熟語への拡張は、主に昭和年代に入ってから現在までの間に起こっている。一方、四字熟語と五字熟語への拡張は、量が少なく、最新の『広』六でも新しい拡張例は確認されていない。

## 5. おわりに

本文は、認知言語学の立場から形態論的に見た明治31年の『大增訂』の「的」付きナ形容詞の語基の典型的な特徴について述べた。その形態的な典型的特徴としては、①文や句ではなく、語である、②漢語である、③二字熟語である、という三点が明らかになった。『大增訂』において、この三つの典型的な特徴をすべて満たしている語基として、本研究は、「機械的」「後天的」「消極的」「貴族的」「積極的」「先天的」「覚性的」「悟性的」「可覚的」「可知的」「審美的」の11語を認めた。上記の三つの形態的特徴は、その後においてそれぞれ拡張例は見られるものの、「的」の語基の典型的な特徴として、2008年に出版された『広』六まで変わらず認

められるものである。

また、本文の考察から分かるように、形態論的な視点から提示した三つの典型的特徴は、「的」の語基の典型的な特徴としては一貫しているが、時代に沿って新しい拡張が見られた。その拡張の流れを整理すると次のようになる。↓は、本研究のデータにより確認できた拡張の発生時期を表し、↓の右側は拡張内容を示す。

表3 形態論的視点から見た拡張の時代の流れ

典型的な特徴	①文や句ではなく、語である	②漢語である	③二字熟語である	
『大増訂』 (明31)			一字	
『補遺』 (明41)		混種語 ↓	三字	
『広辞林』 (大14)				
『辞苑』 (昭14)		和語 ↓		
『広』一 (昭30)		外来語 ↓	四字	↓ 五字
『広』二 (昭44)		↓		
『広』三 (昭58)		↓		
『広』五 (平10)		↓	↓	
『広』六 (平20)	↓ 語基として文や句が出現		↓	

【注】

- 1 国立国語研究所の公開データ<http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/goityosa/>  
(最終アクセス時間：2015年9月6日)
- 3 ○●▲△ (○は語の拍が低；●は語の拍が高；△は助詞や接辞の拍が低；▲は助詞や接辞の拍が高)。
- 4 「それ」が「水遊び」の「水」を指すことはできると思われる方がいるかもしれないが、

それは、日常生活の常識に基づき、連想した結果だと考えられる。文脈的には、ここの「それ」が「水遊び」の一部分の「水」を指すことはできない。

- 5 毎日新聞のデータベース『毎日Newsパック』。
- 6 朝日新聞東京本社発行のデータベース『聞蔵Ⅱビジュアル』の朝刊のオピニオン2の投書欄「声」。
- 7 この13語の中にある「強的、可覚的、覚性的、可知的、悟性的」は、現代的にはすでに見られなくなった。本稿は、主に「的」付きナ形容詞の語基の拡張に関して論述してみるが、消滅の動機などについては今後の課題に譲りたい。
- 8 『論語 憲問篇』の内容で、現代日本語に訳すと「果たしてその通りだろうか。どうしてそんなことが出来るだろうか」である。
- 9 現代語では「アジア(的)」であるが、『広』一では「アジア(的)」になっている。

### 【参考文献】

- 遠藤織枝 (1984) 「接尾語『的』の意味と用法」『日本語教育』第53号, 125-138.
- 王娟・曲志強・林伸一 (2001) 「『的』付きナ形容詞と非『的』ナ形容詞の分類と意味的特徴」『山口国文』第24号, 1-21. (日本語学論説資料(書籍版及びCD-ROM版(画像データ))に収録)
- 王娟 (2004) 「日本語の接尾辞『的』について—朝日新聞による使用実態調査—」『山口国文』第27号, 21-29.
- 王娟 (2011) 「日本語の接尾辞『的』について—英語の『-tic (ic)』との関係—」『比較文化研究』第99号, 203-212.
- 王淑琴 (2000) 「接尾辞『的』の意味と『的』が付く語基との関係について—名詞修飾の場合—」『日本語教育』104号, 50-59.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社.
- 小出慶一 (2004) 「接辞『～的』の新しい用法—『～的には』という用法について」『群馬県立女子大学国文学研究』第24号, 1-14.
- 国立国語研究所報告115 (1999) 『テレビ放送の語彙調査Ⅲ—計量的分析—』大日本図書発行.  
国立国語研究所公開データ「現代雑誌200万字言語調査」  
<http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/goityosa/>
- 齊藤純男 (2010) 『言語学入門』三省堂.
- 南雲千歌 (1994) 「現代日本語の『～的』について—雑誌『中央公論』1992年11月号の場合—」『国際基督教大学日本語教育センター紀要』, 72-98.
- 広田栄太郎 (1969) 「『的』という語の発生」『近代訳語考』東京堂, 281-303.
- 丸山千歌 (1997) 「英語の接尾辞“-tic”の訳語『～的』について—『中央公論』1962年11月号の場合—」『ICU日本語教育研究センター紀要』6, 15-42.
- 山下喜代 (2011) 「字音接尾辞『式・風・的』の意味—プロトタイプとスキーマ—」『青山語文』第41号, 130-142.
- 山田巖 (1961) 「発生期における的ということば」『言語生活』120号9月号, 56-61.
- 廖小梅 (1996) 「『～的』語形の評価義試論」『専修国文』58, 73-89.

【データベース】

毎日Newsパック 毎日新聞社  
聞蔵Ⅱビジュアル 朝日新聞社

謝辞：本研究の出発点となった王・曲・林（2001）は、筆者が山口大学の研究生だった頃に指導教員であった林伸一先生の勧めに応じて書いたもので、当時の熱心なご指導に感謝します。この度、無事に林伸一先生が定年退職を迎えられることを心からお祝い致します。

（おう・けん）